論文要旨

提出者：胡 偉権 (ED133002)

論文題目：戦国期大名権力の支配構造・戦争と外交―最上氏・大宝寺氏を中心として―

本論文は、戦国期出羽国、特に中・南出羽において展開された山形最上氏、庄内土佐林氏と大宝寺氏権力の構造、およびその政治動向をなるべく一次史料の検討に基づいて、当該期最上氏と大宝寺氏の政治動向と発展を復元することを要務として、追跡・分析することにより、両氏の地域権力化を明らかにしようと試みる基礎研究である。

序章においては、戦後になって戦国期大名権力論及び奥羽地域の大名権力論の研究史を整理した上で、本論文の課題を提示する。

戦国期における各地域大名権力の権力特質を巡る議論は、八〇年代盛んに行われている。特に支配の正当性、いわゆる「上からの規定」という視点に立ち、室町期の守護権力との連続性を強調する「戦国期守護」論が提唱されて以降、それに関する賛否両論はともかくとして、中世から近世へと移行する過程において、連続・断絶いずれの立場を取ってでも、戦国期大名権力のあり方と室町幕府の体制構造とのつながりをどう把握すべきか、という課題が避けられない重要なテーマである。

特に近年議論に盛んにされてきた「戦国期守護論」に関する論争においては、議論対象の適用範囲は、本論文の対象である奥羽のような遠隔地が含まれていないという検討対象の偏る問題はよく指摘されている。最近では当該期の各地域の規模や歴史的背景に応じて、室町期以来の多様性の意味を問うべきであるという意見も提起されている。

それを克服するため、伊勢北畠氏、飛騨姉小路氏と越前朝倉氏の「国司」の位置づけと性格を分析する大藪海氏の研究が注目を浴びている。氏が提唱した「幕府・知行主」論は、多様な戦国期の大名権力のあり方をさらに細かく規定することを試みるものと位置づけできよう。

もっとも、室町期と戦国期の連続性を重視すれば、戦国期大名権力の歴史的位置づけをする際に、室町幕府の地方支配体制の実態を抜きにしては語れない。そこで各国の守護・国司だけでなく、もう一本の柱である探題体制を無視してはならないと主張する。

とりわけ、多くの先行研究に共通する問題点として、遠隔地の支配策で室町幕府体制の特色ともいえる九州、奥州、羽州三つの探題職については、力点を創設期の南北朝に置くことが多く、戦国期までの変化と発展に関する見通しと検討は、未だ少ないのではなかろうかと考えられる。

隣の奥州探題大崎氏を素材とする研究や室町期以降伊達氏が台頭するまでの経過を見通す先行研究があるものの、隣の羽州探題体制ないし出羽国の政治構造を検討するものは極端に少ないと言わざるを得ない。

また、戦後における出羽国の大名権力研究は、六〇年代から八〇年代に盛行していた守護領国制論や戦国大名論はもちろん、その後に提起された「戦国期守護」論や戦国期権力論においても、陸奥国と共に検討分析の対象として捨象されてしまった。

それは現存する当該期出羽国の史料が大きく制約される影響によるものだが、もうひとつ重要な要因として、現時点、惣村などの地域社会の視点から中世社会の重層的権力関係の分析を重視する主流の研究方法では、出羽国の様相を覗き見ることは極めて難しく、つまり、大名権力の実態を解明する「下からの視点」がなかなか見えてこないという問題が解消し得ないことがある。

次に、奥羽地域の政治構造を把握する際に、留守家関係者が作成した「余目氏記録」を根拠にして、それをそのまま戦国期に持ち越してしまった研究が多い。その結果として、奥州・羽州両探題職自体が大名支配的実効性を持たないと指摘しつつも、奥羽の大名権力は探題職の獲得を通じて戦国期大名権力化を成し遂げることがやはり必要である、という大きな矛盾が生じる。

なお、戦国期出羽国の大名権力について、近隣の陸奥国と区別なく扱われる傾向が顕著であり、出羽国の動向解明と個性に関しては必ずしも正面から深く究明されたというわけではない。

一方、探題最上氏に専ら注目するのではなく「羽州探題」最上氏のあり方と位置づけを再評価するには、同国に点在する他の領主権力の動向とあり方も見逃してはならないだろう。だが、個別な研究では、個別の事実関係は依然として軍記物に多く依存しており、主な関心点も大名当主個人の政治動向を中心としており、大名権力の構造としての分析も史料的検討も不十分であると指摘できる。

それを克服するため、近年に盛んに行われる自治体史の刊行による新史料の発見を積極的に利用して、大名当主に注目を集める視角を脱却して、諸史料の再検討から同国の大名権力像、家臣団の実態など地域権力としての権力構造をとらえ直すことが、極めて必要であると考えられる。

右の問題意識を念頭に置いて、本論文はこれまで注目されることの少なかった山形最上氏と庄内大宝寺氏を研究対象とする。方法としては主に関連史料の再検討を通じて戦国期出羽国の大名権力の代表格というべき両氏の動向と政治構造を解明することから、当該期における出羽国の政治情勢および大名権力の特質と発展過程を見出すことである。

さらに、本論文は近年の大名権力における武家官位論と外交論研究の成果も視野に入れつつ、発給文書を利用して古文書的考察と分析という方法を取って研究を進めていきたい。

本論文が具体的に検討課題とするものは、次の二つである。一つ目は、これまでの全ての議論の根本である戦国期出羽国の政治様相と関連史料の根本的再検討である。そこで二つの検討対象である最上氏と大宝寺氏を二部に分けて検討を進めていきたい。先行研究では出羽国の大名権力の独自性が注目されることはなく、隣国の

陸奥国と一緒に把握されているのが現状である。これは、史料的制限のほか、先行研究では室町戦国期における出羽国の政治構造を論じる際に、「羽州探題」の存在を強く意識して、それを軸として分析していくからと考えられる。

しかしながら、「羽州探題」に対する先行研究の捉え方と規定については、未だ曖昧の部分が多く、「羽州探題」の在り方と戦国期出羽国の政治構造との関わりに対する解明は十分に行われていない、といわざるを得ない。

それを本論文の研究前提として、本論の最初は羽州探題体制のあり方に関する再検討を行い、そこから室町戦国期を経て、豊臣期から江戸初期までの南出羽の政治様相の再把握を試みた。

第一部第一章「室町中期出羽国の執行体系—羽州探題最上氏の位置づけをめぐって」では、宝徳元年に起こった「赤曾事件」を素材として分析を行った。

最上氏が羽州探題として出羽国に及ぶ権限を有することを端的に示した事例と評価されてきた「赤曾宇問題」について、筆者が新たに発見した『康富記』宝徳二年の記事により、「赤曾宇事件」において最上氏の執事とされる豊田出雲入道が、実は管領細川氏の被官であったことが判明した。

それによって、「赤曾宇事件」に最上氏の関与があったとされた通説に疑問を投げ、管領細川氏が直接小野寺氏に事件の收拾を指示したことを明らかにした上、出羽国における羽州探題の権限とその位置づけに関する従来の理解を再考すべきと指摘した。

「赤曾宇問題」の事実関係が改めて判明したとはいえ、そこから羽州探題最上氏のあり方には依然として不明点が多いことは変わらない。

しかし、「赤曾宇問題」を通じて重要な問題が浮かんできた。それは地域＝出羽国の紛争や執行において、最上氏の職権が必ずしも家格と相応するものとは限らないことである。

また、「赤曾宇問題」のような出羽国の政治問題において、最上氏の関与が必要ともされていなければ、最上氏は小野寺氏、大宝寺氏と安藤氏の上に君臨し、彼らを指図できるほどの権限を持つという想定も、当該期出羽国における最上氏の位置づけも、もう少し慎重に再考すべきと考えられる。

続いて、第二章「戦国期最上氏の官途に関する試論—義守・義光を中心に—」では、第一章で得た新しい事実と右の問題点に基づいて、近年盛んに論じられてきた、いわゆる「武家官位論」に着目し、関連史料と系図類から検討対象として扱われていない最上氏、特に最上義守・義光二代の官途を検討することにした。

第一章で指摘したように、出羽国において、羽州探題最上氏は必ずしも優位に立っていたわけではない。それを最上氏の視点から検討するべく、戦国期の最上氏の自他認識は実際の外交交渉において、具体的にどのように反映されていたか、ということを確認する必要がある。

検討の結果は二点に絞られている。一つ目は、最上氏は羽州探題の家格を持つから、極官が左京大夫であるとされる木下聡氏をはじめとする先行研究の検討であ

る。結論としてはそれを裏付けられる史料が見当たらず、各種の最上氏系図や豊臣政権によって最上義康が修理大夫に叙任されたことから、最上氏の官途は修理大夫である可能性が高いと指摘した。

二つ目は官途の実効性に対する評価である。義守・義光父子の発給文書を分析した結果、最上氏が伊達氏や岩城氏のように積極的に幕府や朝廷に官途を欲求したことは確認できない。

実際、最上氏のみならず、本論のもう一つの研究対象である大宝寺氏を含む多くの奥羽大名も、戦国期には積極的な任官を求める動きがなかった。それは、関東支配の一環として室町幕府に起用された伊達氏、岩城氏と白川氏を除き、奥羽地方の諸勢力の家格が室町時代においてほぼ定着したことに伴って、地位上昇を狙う任官の必要性和実効性が次第に失われていったのではないかと考えられる。

したがって、幕府体制を主体とした視点から武家官位の意義に対する見方は、奥羽においても通用するとは限らない、と指摘した。

第三章「戦国期最上氏の外交と氏家守棟」では、前の二章の成果と見解を踏まえて、戦国期地域権力としての最上氏の外交政策と意思伝達のあり方を検討した。その狙いは近年に盛んに行われた大名権力の外交体制と権力構造との関連性という視点を取り入れ、天正末期最上氏の外交における意思伝達を担う家臣を検出し、最上氏の外交のあり方を分析することである。

そこで、義光の重臣氏家守棟を検討対象として取り上げ、彼が最上氏において外交面全般で関与していたことを明らかにした。その背景は、義光期の最上氏に有力な一門衆の不在、加えて義光の家督相続以来、守棟が重臣として絶大な信頼を獲得していたことにあると指摘した。

その成果によって、当該期最上氏の動向を義光自身に注目しすぎる従来の研究傾向を反省し、より多角的に最上氏の権力構造を読み解く糸口が見えてきたと考えられる。

第四章「天正末期最上氏の領国拡大過程—庄内侵攻を中心として—」において、対象素材は天正十五年に起こった最上義光の庄内侵攻である。そこで、庄内侵攻の時期に際して、これまで従属関係のなかった他地域（庄内、由利）の領主たちを自己の傘下に組み込ませた過程と義光の対応変化が、史料の年代比定を通じて行われた。

義光は当初、庄内内紛の当事者である東禅寺氏永の要請に応じたが、その後に伊達氏と上杉氏はもう一人の当事者である大宝寺義興を肩入れしたことで庄内の内乱に介入するに至り、ついに最上氏と絡んだ戦争になってしまい、出羽国において未曾有で、かつ広範囲な紛争へと発展したのである。

このように義光の庄内侵攻の性格は時間的な経過と共に変化していき、単に最上氏による一方的な侵略であると捉えるべきではないと指摘した。

第四章における庄内の争いの性格を分析したことを踏まえて、第五章「豊臣政権の惣無事政策における最上義光—「庄内問題」の再考を兼ねて—」では、近年議論

が多く交わされた豊臣政権の「惣無事」政策、その中でも事例検討としてよく取り上げられた「庄内問題」の位置づけについて、同事件の検討を進めた竹井英文氏の研究を批判的に再検討した。

そこで、論者は「庄内問題」が当初「地域領主間の紛争」に過ぎなかったものの、豊臣政権の介入を招いてしまったのは、最上義光の提訴による結果だったと指摘した。

次に、竹井氏が指摘した庄内問題の発展推移と、豊臣政権の「庄内問題」の介入経緯と対応の変化を、関連史料の再検討を通じて読み直してみた。

その結果、惣無事政策における豊臣政権の独善的、かつ恣意的措置がされたという竹井氏の見解には賛成したが、「庄内問題」における竹井氏の捉え方には疑問点を三点あげる。

すなわち、(1)「庄内問題」のきっかけは、もう一方の当事者の本庄繁長が上杉景勝の上洛の隙を突いて、反攻を行ったことにあること、そのため、(2)「庄内問題」の勃発は豊臣政権の使者下向以後でなければならないこと。(3)義光の徳川家康に対して、豊臣秀吉とのやり取りしてくれることを依頼する五通の書状の年代比定は、全て同じ年のものではないこと、である。

続いて、「庄内問題」が、豊臣秀吉の態度変化によって最上氏が不利な局面を強いられてしまったのは、伊達氏征伐を準備する豊臣政権が、必要な戦力と期待した上杉家を配慮するため、上杉・本庄側の勝訴を決した結果であると推定し、通説の石田三成ら奉行衆が働きかけたとのことが副次的な原因にすぎないとも指摘した。

第六章「豊臣政権の仙北仕置と最上義光」では、文禄元年（一五九二）に最上氏と仙北小野寺氏の紛争、いわゆる「上浦拝領問題」と、その前提となる「仙北一揆」を関連史料の再検証を通じて、その経緯と両事件における最上氏の関与を検討した。

仙北一揆を語る史料を再検討したところで、通説のように大規模なものだったと裏付けられる史料が検出できず、それによって小野寺氏が処罰され、上浦郡を中心とする地域が没収されたという従来の見解には無理があると指摘し、一揆鎮圧における最上氏の関与も確認できないと述べた。

また、「上浦拝領問題」の原因は、通説の最上氏が小野寺氏領を乗っ取ったというよりも、豊臣政権の蔵入地管理が円滑に行うようにするための判断（＝最上氏に管理を請け負わせる）である。

さらに、こうした豊臣政権の遠国蔵入地に対する支配方針は、やがて国境が接した大名権力同士の紛争を惹起してしまい、後の関ヶ原の戦いにおける両氏の対立も、こうした豊臣政権の恣意的、独善的な支配政策による結果であった、と指摘した。

最後の第七章「最上義康について一幕藩期初頭における最上氏権力の一側面」では、最上義光の長男義康の動向、主に豊臣政権時代から抹殺された直前までの行動を段階ごとに追跡しつつ、彼が関ヶ原の戦いをきっかけに、最上氏において彼が握

る権力の変化を検討した。その結果、彼が抹殺された最大の原因は、義康が秀頼の近習を務めた経歴だけでなく、政宗との仲良い関係が義光にとっても、幕府にとってもかなり不都合なものだったからである。最上家における義康の存在感が大きいにもかかわらず、幕府との関係緊密化に腐心した義光は、我が子の抹殺を敢行し、次男の家親をお世継ぎの座に据えることを決意した。

しかし、義光が没すると、最上氏家臣団の向心力は著しく低下し、最上氏改易につながった。それは義康の死と大きく関係したものである。

戦国期南出羽の大名権力の形成と展開について、第一部で最上氏を中心として同氏の権力成立と性格、さらに当該期同氏の政治動向を検討してきた。しかし、最上氏より先に地域の大名権力として成長し、一時的にせよ、南出羽においてその勢威が最上氏を凌いだ大宝寺氏の存在は無視してはならない。

序章で指摘したように、最上氏と比べて大宝寺氏については詳細的研究どころか、管見の限りではその関連史料の検討も未だ存在しない。出羽国の政治構造と大名権力の諸様相を究明すると共に、最上氏のあり方を相対化するためにも、大宝寺氏の権力形成を取り上げて研究することが必要である。

したがって、第二部「土佐林氏・大宝寺氏と出羽庄内」は、最上氏の存在を相対化するために、同地域に莫大な権勢と影響力を持っていた庄内大宝寺氏の歴史的性格と位置づけを解明する基礎研究である。まず本部各章での検討結果を確認しておく。

第一章「庄内大宝寺氏の系譜に関する一考察—系図検討を中心に—」では、よく引用されたにもかかわらず、ほとんど史料的に未検討である『大日本国出羽国大泉庄当家藤原（殿）前七代系図』を同時代の史料と比較検討することで、同系図の史料価値を明らかにした。

その結果、同系図の記述は主に政氏から浄昌までの部分がほかの関連史料から裏づけられるため、全体的にはその価値と信ぴょう性が高いものであり、それを踏まえて内容の記述に基づき、「系図」の成立は遅くとも十七世紀初期まで遡ることができる」と指摘した。

第二章「土佐林禅棟の政治動向と庄内」では、天文-元亀年間庄内の政治を牛耳る土佐林禅棟の動向をたどった。土佐林禅棟とその一族の活躍とは裏腹に、大宝寺氏の動きが殆ど見られないのは、当時の大宝寺宗家の一時無力化により、庄内が一時衆議体制へと変わったからであり、禅棟はその体制の代理者として形骸化した大宝寺氏の権力を支えていることが判明した。

その上、庄内のみならず、北出羽、越後そして京都の幕府とも親交し、周辺の紛争に調停を申し立てる禅棟の活躍ぶりを改めて確認した。そこで、当該期の庄内は一時的にせよ、大宝寺氏の権威が形骸化しつつ、かろうじて維持されていたが、その支配が後退せざるを得ず、禅棟の台頭による複雑な政治構造の結果、後の大宝寺氏の復権をめぐる元亀の乱を導き出した、との結論をつけた。

第三章「永禄・元亀期出羽庄内の権力交代—禅棟から義氏へ—」では、阿部哲人

氏の論考検討を踏まえて、永禄末期から元亀期にかけての庄内の権力交代の過程、特に阿部氏が力説した、上杉氏と本庄繁長との関わりを検討した。

繁長の乱の後、謙信は越中・能登に進出したため、下越・奥口への関心が薄くなった。その頃に庄内の有力者である禅棟は死去したと思われ、その後には庄内では大川氏の挙兵と竹井氏ら庄内南部の領主層による反乱が相次いで勃発した。

そこで、論者は消極的な態度を示した上杉謙信のかわりに、謙信に冷遇されていた本庄繁長が、それを好機にして境目の「平和」を自ら担い、大宝寺氏の復権運動を成功に導いたことを指摘した。

第四章「発給文書から見る大宝寺義氏の戦争と外交―由利侵攻を手掛かりに一」では、第三章の分析をうけて大宝寺氏の最盛期を築いた大宝寺義氏の発給文書を網羅し、花押、書札札を中心に古文書学的な考察を行った上、義氏の発給文書の特徴から当該期大宝寺氏の権力構造を分析した。

次に、義氏の動向をより把握しやすい由利侵攻を素材に、当該期における中・北出羽の政治情勢との関連性を把握した上、彼が敢行した由利侵攻の経緯とその意義にたどり着いた。結論として、元亀年間以降の北・中出羽では、仙北小野寺氏の内紛を背景に、下国氏、大宝寺氏の激突が免れなくなり、由利侵攻を皮切りに北・中出羽の覇権をめぐる両氏の争いがピーク時を迎えたと位置づけた。

しかし、天正十一年三月に大宝寺義氏が家臣の前森蔵人の謀反に遭い、自害を余儀なくされた。その結果、大宝寺氏と下国氏の戦争は終焉を迎えたが、その後、謀反を図った前森蔵人は、主導権争いを巡って義氏の跡を継ぐ義興と対立し、それぞれ最上義光、上杉景勝そして伊達政宗の介入を要請して、やがて義光の庄内侵攻を招いてしまった。大宝寺氏の庄内支配はここで崩壊するに至ったのである。

最後に、終章では、第一部と第二部の内容を総括した上で、本論文の成果と論文を整理して、室町期から戦国末期までの出羽国、主に中、南出羽を中心に権力構造の再把握をし、大宝寺氏の滅亡原因も最上氏の改易も旧来から規定されてきた政治体制を克服しきれないことを説いたものの、両者の状況が異なるため、当該期出羽国の政治、権力構造の多様性はそれぞれの地域を支配する大名権力の支配と展開に影響を与えることを立証した。広い出羽国の中でも大名権力の支配様相の多様性を示しているため、隣の陸奥国を同一視すべきでないことを訴えた。

今後の課題として、未解明の一次史料の活用や考古学、城郭学など他分野の成果も取り込み、多角的に復元することで、北出羽の大名権力や、他の大名権力と在地領主を取り上げてそれらの実像を解明し、当該期における新たな出羽国の歴史像と全体像を構築することと、遠隔地として出羽の大名権力の支配を在地動向と発展との関係を明らかにすることが不可欠のものであると考えられる。今後は解明を深めていきたい。

初出一覧

本論文では、一部既発表の論文が含まれる。収録の際、表記の統一と共に、一部加筆・修正を行った。

〈第一部 最上氏の権力と政治構造〉

- 第一章 室町期出羽国の執行体系—羽州探題最上氏の位置づけをめぐって（『日本歴史』十二月号（通算・八三五号）、二〇一七年）
- 第二章 戦国期最上氏の官途に関する一考察（新稿）
- 第三章 戦国期最上氏の外交と氏家守棟（新稿）
- 第四章 天正末期最上氏の領国拡大過程—庄内侵攻を中心として—（『山形史学研究』四十五、二〇一六年）
- 第五章 豊臣政権の惣無事政策における最上義光—「庄内問題」の再考を兼ねて—（新稿）
- 第六章 豊臣政権における最上義光の動向—仙北仕置を中心に（新稿）
- 第七章 最上義康について—幕藩期初頭における最上氏権力の一側面（原題「最上義康について」『山形史学研究』四十三・四十四合併号、二〇一三年）、のち竹井英文編『シリーズ・織豊大名の研究6 最上義光』に収録（戎光祥出版、二〇一七年）

〈第二部 戦国期庄内における土佐林氏・大宝寺氏権力の政治構造〉

- 第一章 『大日本国出羽国大泉庄当家藤原（殿）前七代系図』に関する一考察（新稿）
- 第二章 土佐林禅棟の政治動向と庄内（『山形県地域史研究』、二〇一四年）
- 第三章 永禄・元亀期出羽庄内の権力交代—禅棟から義氏へ—（新稿）
- 第四章 大宝寺義氏の戦争と外交—由利侵攻を手掛かりに—（『秋大史学』六四号、二〇一八年）